令和６年度岡崎市教育研究大会リポート

１．　| ６Ｂ | 音楽（中） |

岡崎市立城北中学校　安藤　朗広

２．研究テーマ

和声に目を向け、音楽を味わうことができる生徒の育成
～中学校３年・伴奏となる和声の創作の実践を通して～

３．研究概要

（１）はじめに

音楽の雰囲気は様々な音楽を形づくっている要素が影響し合って決定づけられるが、大きなもののひとつに和声がある。しかしながら、歌唱になれば音取りや強弱や発音の表現、鑑賞になれば音色や音の高さ、音楽の形式や構造に留まり、音楽で心が動くときにどのような和音が響いているのかということや、機能和声についての学習機会をあまり設けることができていない現状がある。ポップス音楽でもクラシック音楽でも、意外な和音進行や、感動的な転調など、和声が曲調に与える影響は非常に大きい。また、和声を感じ取ることで、豊かに音楽を鑑賞できるだけでなく、表現活動においても、音の出し方や音色の決定など、音の扱い方に気をつかうことができるようになると考える。

本年度の中学校３年生は、入学時より合唱コンクールを行ってきており、音の重なりを合唱で味わってきている。また、創作活動においても、ボーカロイドを用いて、旋律を伴奏の和声に合わせるということも学んできている。生徒によっては音楽の授業を受けることが最後になる中学校３年生だからこそ、これから出会う様々な音楽を、旋律や歌詞だけでなく、その裏にある和音の響きを感じ取ったり、和声の進行に耳を傾けたりと、音楽全体を味わうことができるようになってほしいという願いをもった。そこで、研究テーマを「和声に目を向け、音楽を味わうことができる生徒の育成」として、実践を行うこととした。

題材は「旋律に伴奏となる和声をつける」という創作とした。誰もが知る旋律に、様々な和声をつけることにより、主旋律の背景が変わり印象が大きく変わることに気づくことができる。また、伴奏を協同で製作する場を設定することにより、その和声を選択した意図やよさを共有しながら創作活動に取り組むことができる。そして、完成した和声の伴奏を仲間と聴き合うことで、仲間から刺激を受けたり、自分の作成した伴奏のよさに気づいたりしていくことができるであろう。

そして、２学期の合唱コンクールでは、伴奏に対する自分の声や、他声部とのハーモニーなど全体の響きを感じながら歌うなど、和音や和声に目を向けながら歌唱表現していく姿を期待したい。

（２）目指す生徒像

目指す生徒像を以下のように設定した。

・和声の違いによる音楽全体の印象の違いを感じることができる生徒
・和声を味わいながら音楽を聴いたり、表現したりしようとすることができる生徒

（３）研究の仮説

目指す生徒の育成のために、以下に挙げる２つの仮説をもとに実践を行う。

仮説１…色々な和音を試したり、協同したりしながら伴奏付けを行うことで、和声の違いによる音楽全体の印象の違いを感じ取ることができるであろう。
仮説２…それぞれの和音の特徴を捉えたり、既存の楽曲の和声がどのようになっているかを知ったりすることで、和声を味わいながら音楽を聴いたり、表現したりしようとすることができるであろう。

※和音はその瞬間にならされる重なった音（長三和音や短三和音など）、和声は和音のつながり（進行、終止）などを指す

（４）仮説に対する手立て

仮説に対する手立てとして、次のような取組を行う。

仮説１に対して

手立て１…使用する和音を選択性にすることで、様々な和声を試し、印象の違いを感じ取りながら創作活動に取り組むことができるようにする。

手立て２…簡単に再生できるようタブレットを用いることで、様々な和声を試しながら創作活動に取り組むことができるようにする。

手立て３…仲間と協同して取り組むことで、和声を選択した意図やよさといった全体の印象を共有しながら、活動に取り組むことができるようにする。

仮説２に対して

手立て４…既存の楽曲の和声を紹介し、分析する時間を設けることで、旋律の裏で鳴らされる和声に目を向けながら楽曲を味わうことができるようにする。

４．実践

（１）単元構想

和音って何だろう
１時間 【1】 【2】

和声について基本的な知識を学習し、かえるの歌やファミリーマートの入店音にあわせて主要三和音（長三和音）を用いて伴奏をつける。
【学習内容　三和音　長三和音　全終止　Ⅰ　Ⅳ　Ⅴ】

・長三和音は明るい響きがする和音だな。
・Ⅴ⇒Ⅰと進むから終わった感じがするんだな。
・Ⅰ⇒Ⅴ⇒Ⅰでなく、Ⅰ⇒Ⅳ⇒Ⅴ⇒Ⅰの方が色が変わる感じがして好きだな。

ⅠⅣⅤ以外にどんな和音があるのだろう
１時間 【1】 【2】 【3】 【4】

和声について少し応用的な知識を学習し、かえるの歌やファミリーマートの入店音にあわせて長三和音、短三和音を用いて伴奏を付ける。
【学習内容　短三和音　Ⅱ　Ⅲ　Ⅵ　Ⅴ⇒Ⅰ　Ⅴ⇒Ⅵ】
紹介する楽曲　夏の思い出（前半）　花（前半）

・短三和音は暗い感じの響きがするな。
・Ⅴ⇒Ⅵだと、なんだか寂しく終わってしまった感じがする。
・途中にマイナーコードをもってくると明るい、暗いが混ざっていろいろな表現ができる

自分のお気に入りの和声伴奏を作ろう
１時間 【1】 【2】 【4】

さまざまな和声を活用し、かえるの歌やファミリーマートの入店音にあわせて和声の伴奏をつける。
【学習内容　短三和音　Ⅱ　Ⅲ　Ⅵ　Ⅱ⇒Ⅴ⇒Ⅰ　Ⅳ⇒○　Ⅴ⇒Ⅵ】
紹介する楽曲：小さな恋の歌　アイドル　ダンスホール

【学習内容　Ⅰから始まらない楽曲　】
・Ⅰから始まらないと途中から始まった感じで意外な感じがする。
・やっぱりⅠで終わりたい
・途中、経由する和音が違うと全体の印象が全然違う。

【手立て１】
使用する和音を選択性にすることで、様々な和声を試し、印象の違いを感じ取りながら創作活動に取り組むことができるようにする。

【手立て２】
簡単に再生できるようタブレットを用いることで、様々な和声を試しながら創作活動に取り組むことができるようにする。

【手立て３】
仲間と協同して取り組むことで、和声を選択した意図やよさといった全体の印象を共有しながら、活動に取り組むことができるようにする。

【手立て４】
既存の楽曲の和声を紹介し、分析する時間を設けることで、旋律の裏で鳴らされる和声に目を向けながら楽曲を味わうことができるようにする。

（２）抽出生徒の設定

以下の生徒を抽出生徒として設定し、変容を追うことで実践を検証する。

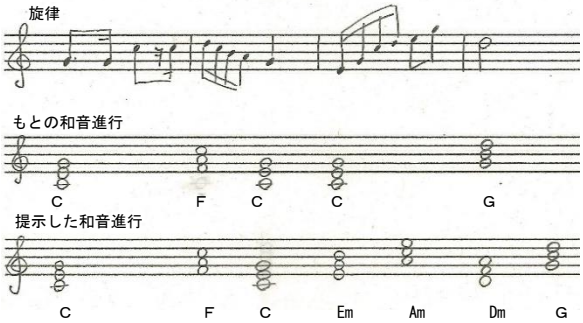
生徒Ａ…「花」の学習では、旋律の動きや、強弱・表現記号から作曲者の意図を読み取り、歌い方を考えることができた。また「城北中ＣＭソングを作ろう」では、音の高さやリズムを工夫したり、合いの手を入れたりと意図をもって創作活動を行うことができた。意欲的に活動に取り組むことができるが、イメージを膨らませることや抱いた印象を自分の言葉にすることは少し苦手意識を感じているように思う。仲間から刺激を受け、それぞれの和音や和声の印象の違いを自分なりの言葉にできていくとよいと感じる。

生徒Ｂ…生徒Ａと同じチームに所属し、音楽の好きな生徒である。思ったことやイメージを自分なりの言葉にしたり表現することができるため、チームでの活動でも印象を言葉にすることができると予測される。生徒Ａと同じチームで活動することにより、響きの違いを自分なりの言葉にし、他の生徒の刺激になる姿を期待する。

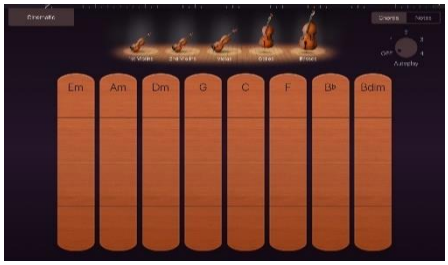
１時間目【和音って何だろう】

１学期歌唱は、滝廉太郎作曲の「花」で行った。導入では「花」を歌った後、和声を変えて曲を演奏した。【資料１】

演奏し、何が違うのか問うと、生徒は伴奏が違うと答えた。伴奏の何が違うのかと問うと、「音」と呟く生徒が多くいた。「和音」という言葉は出てこなかったが、生徒は和声の違いによる響きの違いを感じ取っているようだった。印象はどう違ったかと問うと、「ちょっとおしゃれな感じ」と呟く生徒がいたが、響きの違いがかっても印象の違いを述べることができる生徒はほとんどいなかった。



【資料１】もとの和音進行（上）と提示した和音進行（下）



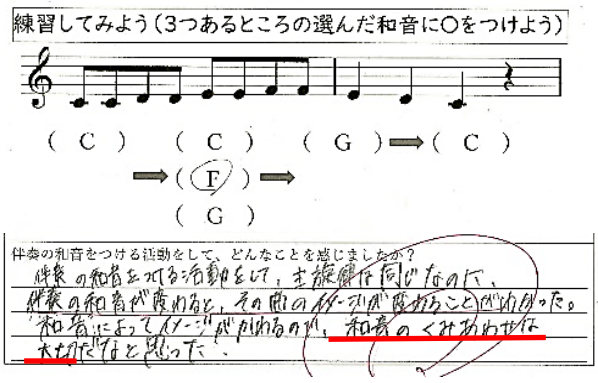
【資料２】ガレージバンドの使用

和音の違いを感じ取ることができたところで、和音って何だろう？と学習課題を立て、和音の知識についての学習をスタートした。本時は、三和音、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴの和音の響き、Ⅴ→Ⅰと進行したときの終止感を意識できるよう授業を行った。

特に、終止については、実際に音を鳴らすことで印象を感じとることができるよう、ガレージバンドの Strings の音色で、G→Cのコードを鳴らしながら終止した感じを味わうことができるようにした。【資料２】Ｃをスタートとし、どのような和音を経由したとしても最後にG→Cとすることで曲が終わった感じがする、と説明したのち、各自で和音を鳴らす時間を設けた。その中で「C→G→C」と進むと「礼」と同じになると、ⅠとⅤの和音のキャラクターも感じ取っていくことができた。

終止の感じを味わうことができたのち、実際の曲に和音の伴奏をつける活動を行った。取り上げたのは「かえるのうた」の最後の部分と「ファミリーマートの入店音」である。この２曲を選んだ理由は、メロディを音で再現せずとも、ほとんどの生徒が頭の中でメロディをイメージすることができるということが理由である。

和声付けの際には、抵抗が少なくなるよう、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴの和音から選択するという形をとった。各生徒自分の好みにあう伴奏を選んでいた。



【資料３】生徒Ａの使用した和音（上）と授業の感想（下）

生徒Ａはかえるの歌で選択できる部分をＦの和音を選択した。それによってどのような印象になるのかまでは書き込むことができていなかったが、感想に見られる「和音の組み合わせは大切」という記述からは、和音や和声によって、全体の印象が変わるということを強く感じていることがわかる。

生徒Ａのように、一か所の和音が違うだけでも印象が異なることを多くの生徒が感じることができていたため、２時間目は、和音の種類を増やし、和音によって多様な和声の表現を生み出すことができる味わえるようにしたいと考えた。

２時間目【いろいろな和音を使って伴奏をつくろう】

２時間目は、始めに、Ｃ・Ｆ・Ｇの主要三和音で演奏できる曲として、滝廉太郎の「花」と中田喜直の「夏の思い出」のコードを示し、ガレージバンドを用いて伴奏を弾く時間を設けた。その後、これ以外の和音はどんな響きがするのだろうと投げかけ、ハ長調の主要三和音以外のⅡ・Ⅲ・Ⅵの和音を扱った。

Ｃ・Ｆ・Ｇといった長三和音に対して、Ｄｍ・Ｅｍ・Ａｍは短三和音になるため、長三和音の明るい響きと、短三和音の少し暗い響きの違いを味わうことができるよう、聴き比べる時間を設けた。生徒はＣやＤｍ、ＥｍやＧの違いは、長三和音なのか短三和音なのかの判断をしやすいと反応していたが、Ａｍの判断は難しい様子であった。

その後、短三和音も選択肢にふくめて伴奏付けを行った。その後、チームで和音の進行を決めようと投げかけ、３人あるいは４人での和音の伴奏付けを行った。

生徒は「一度マイナーコードを入れたほうが後が明るくなって聴こえる」「Ｃ・Ｆ・Ｇだけだと安定した感じがする」と、長三和音、短三和音それぞれの特徴を意識して伴奏付けを行っていた。

生徒Ａのチームは、メロディラインから、和音の構成音に着目し２つ目はＥｍを選択していた。一人がメロディを鳴らし、もう一人が和音を鳴らすという形で、響きを確認していた。Ｃの次の和音を、ＦにするかＥｍにするかで迷っていた。生徒ＡはＥｍが好みであったが、同じチームで話をしていた生徒Ｂは、あとのＥｍとの対比からＦの和音にするとよいと、少し気を遣いながら「Ｆかな」と発言し、チームの和音の選択はＣ→Ｆ→Ｅｍ→Ｇ→Ｃとなった。【資料４】

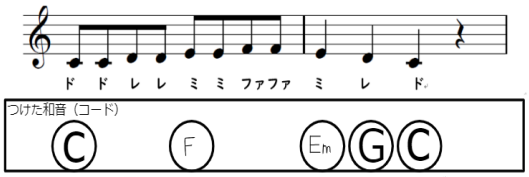
生徒Ａの感想の「どちらも…けれどＦのほうが」という記述からは、長三和音から感じられる明るい響きが大切だと、自分のイメージに合わせて和音を選択しようとしていることがわかる。【資料５】

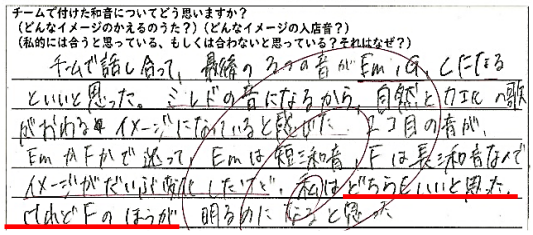
生徒Ｂの感想には「最初高くなりやるぞ……元気でワクワク」と、Ｆの音が与えるイメージを具体的に記述している。【資料６】

生徒Ａはイメージを具体化できる生徒Ｂと、和音の選択について考える学習を通して、選択した和音に「明るい」と意味づけし、和音の選択の重要性について、考えを深めることができた。

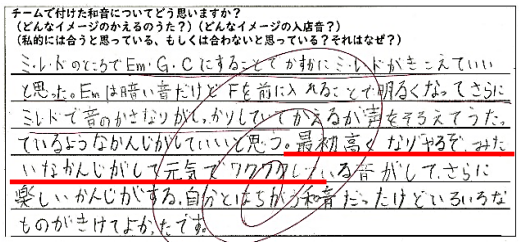
生徒Ｂ：もう一回聴いてみよう。
♪C→F→Em→G→C
♪C→Em→Em→G→C
生徒Ａ：うちはEmかなＦって書いたけれど、最後がこの形なら、Emの方がいいと思う。
生徒Ｂ：どうしよう。２択だよね。
♪C→F→Em→G→C
♪C→Em→Em→G→C
生徒Ａ：うーん、でもＦかな。
生徒Ｃ：私もＦかな。
生徒Ｂ：うんＦでいこう。ここはいいよね（Em→G→C）。

【資料４】チームでの活動の様子




チームで付けた和音についてどう思いますか？
（どんなイメージのかえるのうた？）（どんなイメージの入店音？）
（私的には合うと思っている、もしくは合わないと思っている？それはなぜ？）
チームで話し合って、最後の2つの音がEmになってるといいと思った。ミレドの音になるから、自然とカエルの歌がわかる感イメージになっていると思った。2つ目の音が、EmかFかで迷って、Emは短三和音、Fは長三和音なのでイメージがだいぶ変化したので、私はどちらもいいと思った。でもFのほうが明るくなったと思った

【資料５】選択した和音と生徒Ａの感想


チームで付けた和音についてどう思いますか？
（どんなイメージのかえるのうた？）（どんなイメージの入店音？）
（私的には合うと思っている、もしくは合わないと思っている？それはなぜ？）
ミ・レ・ドのところでEm・G・Cにすることでかわいにミレドがきこえていいと思った。Emは暗い音だけどFを前に入れることで明るくなってさらにミレドで音のかさなりがく、かりしてかえるが声をそろえてうたっているようなかんじがしていいと思う。最初高くなりやるぞみたいなかんじがして元気でワクワクしている音がしてさらに楽しいかんじがする。自分とはちがう和音だったけどいろいろなものがきけてよかったです。

【資料６】生徒Ｂの感想

３時間目【自分好みの伴奏を作ろう】

３時間目は、実際のポップスの楽曲を用いて、どのような和声が扱われるのかについて解説した。楽曲は、MONGOL800 の「小さな恋の歌」、YOASOBI の「アイドル」、Mrs.Green Apple の「ダンス・ホール」を扱った。【資料７】

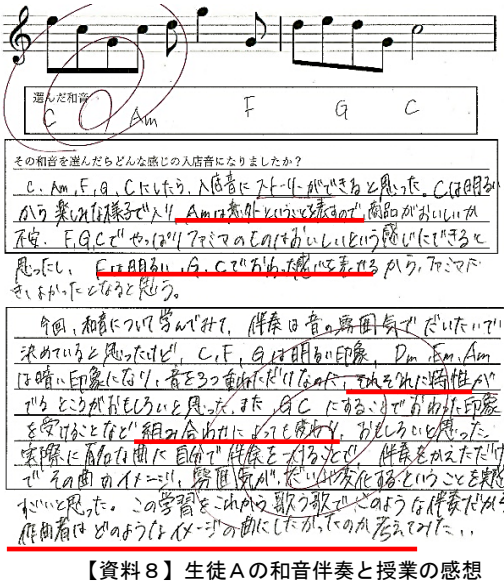
【資料７】
扱った楽曲の和音進行

「小さな恋の歌」では、サビの部分がＦから始まっていること。これによりどっしりとした印象ではなく、疾走感のある印象、「アイドル」では、Ａmのダークな印象になっていること、そして、必ずしもその調の和音のみで楽曲ができているわけではないこと。「ダンス・ホール」では、メロディのリズムに合わせて和音を動かすなど和音が変わるタイミングも自由であること、４回出てくる３つの和音が毎回違うことで、異なる印象を与えることを扱った。実際にガレージバンドで和音を鳴らすことで、伴奏を弾けるおもしろさを感じているようで、メロディの裏にある多様な和声を意識していると感じられた。

その後、はじめの音はＣ・Ｆ・Ａm、終わりの音はＣ・Ａmという助言をしたうえで、和音の変わるタイミング、扱う和音を指定せず伴奏付けを行った。扱った曲は１時間目と同じ「かえるのうた」もしくは「ファミリーマートの入店音」である。活動に困る生徒については、和音の変わるリズムを指定して伴奏付けを行った。

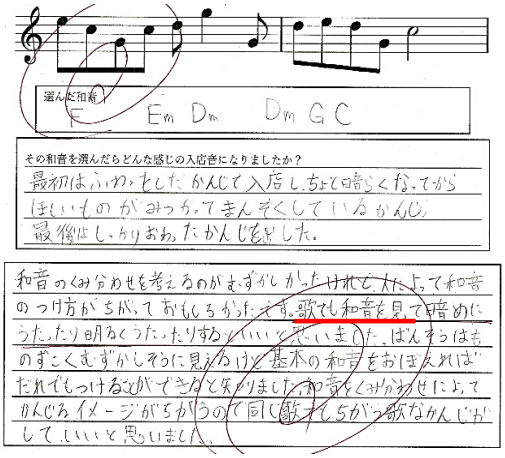
生徒は、マイナーコードを用いたりＢ♭というハ長調の和音でない音を盛り込んだり、各々自分好みの伴奏を作っていた。やはり明るくシンプルな音がいいと、主要三和音で伴奏を付ける生徒もいた。和音単体の響きや、和声を聴き、それが生み出す印象を結び付けながら伴奏を付けていくことができた。

生徒Ａは入店音に和音付けを行った。「Ａmは…表す」「Ｆは明るい…表せる」という記述からは、生徒Ａが和音や和声の印象を自分なりに理解し、具体的なイメージをもち、意図的に和音を配置することができていることがわかる。また、生徒Ａの授業の感想に見られる「それぞれに特性」「組み合わせによっても変わり」という言葉からは、和音にも、和声にも着目して曲全体をとらえることも大切であるという意識が芽生えていることがわかる。生徒Ａはこの単元を通して、それぞれの和音の響きの違い感じ取り、を和音の違いによる、曲全体の印象の違いを感じ取ることができるようになったといえる。また、後半に述べられている「作曲者は……ののか考えて」という記述からは、聴き方や楽曲分析の際に本単元の学びを活かそうとしていることがわかる。和音それぞれの特徴を感じ取ったうえで、既存の楽曲の伴奏を行ったことで、生徒Ａは、和声を味わいながら音楽を聴いたり、表現したりしようとする意識をもつことができた。【資料８】



【資料８】生徒Ａの和音伴奏と授業の感想

生徒Ｂの感想の「歌でも和音を見て」という記述からは、創作に限らず、和声を味わって聴いたり歌ったりことが表現を豊かにすると感じることができていることがわかる。生徒Ｂも、学びを鑑賞や表現活動に活かそうとする意識をもつことができた。【資料９】



【資料９】生徒Ｂの和音伴奏と授業の感想

５．考察

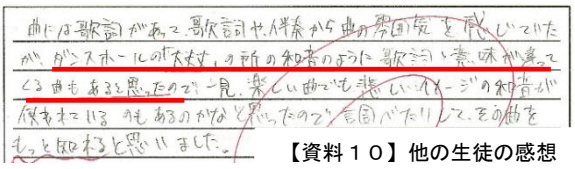
（１）仮説の検証

仮説１…色々な和音を試したり、協同したりしながら伴奏付けを行うことで、和声の違いによる音楽全体の印象の違いを感じ取ることができるであろう。

生徒は、伴奏となる和音を選択しながら、自分の好みの伴奏を作成していくことができた。これは、使用できる和音を選択制にしたこと【手立て１】や、タブレットで簡単に再生できるようにしたこと【手立て２】で、試しながら伴奏の和声を決定していくことができた。また、チームでの話し合いでは、どうしてその和音を選んだのかという理由を共有したり、どんなイメージを抱くのかと共有することで、生徒は和音の響きの違いを具体的なイメージにつなげたり、選んだ和音に価値を見出すことができた【手立て３】。それにより、和音や和音の進行の違いによって、曲全体の印象が変わってくることを感じ取ることができた。

このように、各手立てが有効に働いたこと。また、資料８の上部で生徒Ａが、和音の響きを意識しながら和音を選択し、イメージを膨らませ、全体の印象を考えて創作活動に取り組めていることから、仮説１は立証されたといえる。

仮説２…それぞれの和音の特徴を捉えたり、既存の楽曲の和声がどのようになっているかを知ったりすることで、和声を味わいながら音楽を聴いたり、表現したりしようとすることができるであろう。


曲には歌詞があって、歌詞や伴奏から曲の雰囲気を感じていたが、ダンスホールの「大丈夫」の所の和音のように歌詞と意味が違ってくる曲もあると思ったので一見、楽しい曲でも悲しいイメージの和音が使われているのもあるのかなと思ったので意図べたりして、その曲をもっと知れると思いました。

【資料１０】他の生徒の感想

実際の楽曲の和音進行を提示したり、それをガレージバンドで鳴らしたりすることで、生徒は曲の背景にある和音の存在を強く意識することができた。生徒Ａは資料７で、和音によって印象が変わることから、作曲者の意図を読み取ろうとすることができると考え、生徒Ｂは資料９で、声の出し方に活かすことができるという内容の記述をしている。また、他の生徒も「ダンスホールの…違ってくる曲もあると思った」と既存の曲の歌詞の裏の和音の意図に目を向けていた。【資料１０】「花」をはじめとした、生徒の知っている楽曲について和声の解説をし、実際に伴奏を鳴らしてみたことで、生徒は、その和音が鳴ることでどんな印象がするのか、どうしてその和音が鳴らされるのかということまで意識することができた。このことにより、鑑賞や表現に和音を活かそうと考える姿が見られた。

手立て４が有効に働いたことや、和音の印象を鑑賞や表現に活かそうとする記述がみられたことから、仮設２が立証されたといえる。

（２）成果と課題

成果として、座学的で生徒が退屈してしまうのではないかと感じていたが、思った以上に生徒たちは意欲的に学んでいたことが挙げられる。実際に操作が楽なガレージバンドにより、伴奏の和音を鳴らすことができたこと、既存の楽曲の伴奏を弾けたこと、和音の進行でも曲をつくれたような満足感を得られたことが理由であると考えられる。また、チームでの学習により、和音進行を一つにまとめていくことの難しさも感じることができた。感じることが人それぞれだからこそ、その曲で何を伝えたいのか、選択した和音のよさは何なのか、意見を交流したり、音に注意しながらチームの活動を行ったり様子が見られた。

課題として、今回は脳内でメロディを再生させながらの伴奏付けとなったが、歌わせながら和音付けを行うことで、旋律の表現の仕方まで意識することができたことである。操作が多かったことから時間を設けることができなかったが、実際に作った和音で歌ってみる、歌い方を考えてみるところまで行うと、特に２学期の合唱コンクールで伴奏を意識しながら表現を工夫する生徒が多く見られていくのではないかと考える。

（３）おわりに

単元後、生徒が「この曲のこの部分ってどうなってますか？」と声をかけてきた。説明をすると「なるほど」と目を輝かせていた。感覚的に捉えていたものと理論が結びついた瞬間である。音楽の感動の裏にはさまざまな仕組みがある。なぜ感動するのか、何が起きているのか、に目を向けながら、生徒が今後の音楽活動を豊かにしていってほしいと願っている。